曲　目　解　説

明治祭 奉納舞楽

貴　　徳（きとく）＝右舞

漢の宣帝の神爵年間に匈奴の日逐王が漢に降伏し貴徳侯になったという故事によっている。舞人は白い隆鼻白髭の面をつけ、鳳凰をかたどった別様の鳥甲を冠り、毛べりの襠襠装束を着け、太刀を佩き、鉾をもって舞う。その舞い振りは気品高く勇壮である。「破」と「急」とが伝わっている。

散手の番舞で、流鏑馬の勝負舞である。

12月17日の春日若宮おん祭では十数曲奉納される舞楽の終盤に舞われ、散手とともに「中門遷の舞楽」といい、かつては興福寺一乗院宮、大乗院御門跡、春日社司がこの間に出仕したという。

拍　子　神　社

旧南都楽所の辻家の邸内社として祀られ、祭神は拍子神（南都楽聖　狛　近真…雅楽書『教訓抄』の著者）と伝えられている。

例祭は11月３日、芸能の神と崇敬され芸能関係者の参拝も多い。

奈良市登大路町 県庁東交差点北東隅に鎮座する。

管　絃　の　部

盤渉調音取（ばんしきちょうねとり）

雅楽には６つの調子があり、盤渉調は洋楽のＢ音に近い盤渉調音を基音とする調子をいう。音取とは元来演奏する各楽器の音調を整え和すことを目的として演奏したものが、次第に演奏する管絃の曲を示し、その雰囲気をも兼ねてもたらす意味で前奏する短い曲をいう。

青　海　波（せいがいは）

中国の西域（中央アジア）の地名を曲の名としたもので、唐の時代に中国に伝わり、その後わが国に伝来したものである。

仁明天皇の承和年間に和邇部太田磨により、改作されたと言われる。宮中に於いても、輪台を「序」とし、この曲を「破」として組み合わされ優雅な舞楽曲として奏されている。

本日は、舞の伴わない管絃の形で演奏する。

舞　楽　の　部

振　　鉾（えんぶ）

舞楽のはじめに必ず奏する曲で、国土安穏、雅音成就を祈って舞台を浄めるために舞われる。

鉾を持つ赤袍の左方舞人と、緑袍の右方舞人が笛の乱声にあわせて鉾を振って舞う。

北　庭　楽（ほくていらく）＝左舞

唐の教坊楽（宮廷歌舞の教習曲）に北亭子という曲があり、古くわが国に伝えられたが中絶していたのを亭子院（宇多天皇のこと）によって再興せられたものであるといわれる。また宇多天皇の御代、不老門の北庭でこの曲が作られたので、この名がつけられたという。

赤の襲装束の右肩をぬぎ、動きの速く華やかな舞を舞う。

地　　久（ちきゅう）＝右舞

古代朝鮮地方伝来の四人舞で、緑の襲装束に赤い優しい面をつけ、鳳凰をあしらった鳥甲を冠って舞う優美な舞である。「破」と「急」の舞がある。

納　曽　利（なそり）＝右舞

高麗楽で伝来不詳であるが、竜の舞い遊ぶさまを表した曲といわれ、「破」と「急」の二楽章から成る曲である。納蘇利とも書き、全体に濃緑色で銀色の目と牙、吊り顎の竜を象った面をつけ、毛べりの襠襠装束を着け銀の桴を右手に持って舞う。

舞人は一人であるが、二人で舞うときを落蹲といい、南都楽所の右方舞である大神流独特のものである。枕草子に「落蹲は二人して膝踏みて舞ひたる」とあるのがこれで、他の楽所では一人舞を「落蹲」二人舞を「納曽利」といっている。

右方舞楽のうち最も代表的なものの一つである。

長　慶　子（ちょうげいし）

舞楽の会が終わって、参会者が退出するときに演奏する曲で舞はない。

平安時代の楽聖、源博雅の作曲にかかるもので、曲調のよく整った、リズムの軽快な曲である。